児童期の知能・学力に関する研究（3）

—学力とコンピテンスの関係—

○宮本友弘・都築忠義・相良順子・家近早苗（非会員）

（聖徳大学児童学部）

キーワード：児童期，学力，コンピテンシ

Research on intelligence and academic performance in childhood III: Relation between academic performance and competence

Tomohiro MIYAMOTO, Tadayoshi TSUZUKI, Junko SAGARA and Sanae IECHIKA[#]

(Faculty of Child Studies, Seitoku University)

Key Words: childhood, academic performance, competence

目 的

本研究では児童期の学力と学習コンピテンスの関係について検討する。桜井(1983)は小学3年生～中学3年生にかけて学習コンピテンシが低下傾向にあることを示したが、小学5年生と小学6年生を比較した別の研究(桜井, 1992)では差がみられなかった。このように学年変化の様相は一貫しておらず、また、学力との直接的な関連性については十分に検討されてはいない。そこで、あらためて小学4～6年生のコンピテンシの様相を探るとともに、学力との関連性を検討する。

方 法

調査対象者 私立大学附属小学校4年生83名(男子34名、女子49名)、5年生87名(男子40名、女子47名)、6年生80名(男子31名、女子49名)。

質問紙 ①興味や関心をもっていること：16項目(読書・音楽・ままごと等)に対して3件法で回答を求めた。②児童用コンピテンシ尺度(桜井, 1992)：児童の回答負担を考慮し、4つの下位尺度のうち、学習コンピテンシ(以下、学習)、社会コンピテンシ(以下、社会)、自己価値の3つを使用した。各10項目、4件法による回答。

学力の指標 協力校が毎年2月に実施してきた教研式標準学力検査NRTの結果(全国基準による偏差値)を使用した。入学後、2年生までは国語、算数の2教科、3年生以降は社会、理科を加えて4教科が実施された。

手続き 質問紙調査は2012年3月に実施された。クラスごとに担任が配布、回収した。本研究では児童用コンピテンシについて分析した。また、学力の指標については教科間相互に強い相関が認められたので、全学年を通して実施されている国語と算数の合計値を用いた。

結 果

コンピテンシの学年変化 図1に各学年の下位尺度得点の平均値を示した。3(学年)×2(性)の分散分析を行った。学習では学年の主効果が有意であったが($F(2, 229)=3.11, p<.05$)、多重比較の結果では5%水準の有意差はみられなかった。性の主効果も有意で女子<男子であった($F(1, 229)=18.65, p<.01$)。社会では学年の主効果のみが有意で($F(2, 227)=4.28, p<.05$)、6年<4年であった。自己価値では学年の主効果が有意で($F(2, 225)=9.50, p<.01$)、5年、6年<4年であった。性の主効果も有意で女子<男子であった($F(1, 225)=6.54, p<.01$)。

コンピテンシ相互の関連 自己価値を従属変数、学習、社会を独立変数にして重回帰分析を行った。その結果、4年生で $R^2=.61$ 、学習 $\beta=.46$ 、社会 $\beta=.43$ 、5年生で $R^2=.61$ 、学習 $\beta=.41$ 、社会 $\beta=.51$ 、6年生で $R^2=.58$ 、学習 $\beta=.36$ 、社会 $\beta=.55$ であった(β はすべて $p<.01$)。

学力と学習コンピテンシの関連 現学年の成績と学習コンピテンシの相関を求めた結果(表1)、有意な正の相関が認められた。また、単回帰分析によって過去の各学年時の成績から予測される現学年の成績と実際の成績の差(残差)を求め、

学習コンピテンシとの相関を求めた。表1の通り、いずれの学年においても、予測時の学年がより低いほど、学習コンピテンシとの相関は強かった。

考 察

いずれのコンピテンシも4年から5年にかけて低下し、5年と6年生はほぼ同水準であった。先行研究と異なる傾向であり、今後さらなる検討が必要である。男女差については先行研究と同様であった。また、全学年ともに自己価値は学習と社会の両コンピテンシから同等の影響を受けており、学習面の有能感だけで自己価値が決定づけられるわけではなかった。さらに、学習コンピテンシは、現在の学力が、低学年時の学力から予測される学力よりもプラスに変化しているほど、高かった。現在の成績だけでなく低学年からの成績の向上も中高学年の学習コンピテンシに影響する可能性が示唆された。

引用文献

桜井茂男(1983). 認知されたコンピテンシ測定尺度(日本語版)の作成 教育心理学研究, 31, 245-249.

桜井茂男(1992). 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32, 85-94.

Figure 1 コンピテンシの学年変化

Table 1 現学年の成績、及び、各学年時成績から予測される成績との残差、と学習コンピテンシの相関

	4年	5年	6年
現学年の成績	.712**	.590**	.681**
5年時予測成績との残差	—	—	-.028
4年時予測成績との残差	—	.242*	.063
3年時予測成績との残差	.321**	.287*	.188
2年時予測成績との残差	.425**	.287*	.278*
1年時予測成績との残差	.535**	.434**	.415**

** $p<.01$ * $p<.05$

本研究は科研費(23653209)の助成を受けた。